

夏号

第310号

一粒の麦

社会福祉法人エデンの園

2018年7月21日

ひとつぶのむぎ



花の街のみなさん



聖書のことは

一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。
しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。(聖書 ヨハネの福音書12章24節)

～ 花の街(高齢期の支援)の生活支援をとおして ～

生活支援員(花の街チーフ) 谷 口 博 孝

季節は青葉が芽生える頃から、暑さが厳しさを増す季節へと移り変わりました。今年ももう半年過ぎました。時が過ぎたといえ、昨年3月に東館を改築し「花の街(高齢者支援)」へと生まれ変わって早、1年半が過ぎました。

加齢による心身の状態変化に対応すべく生活環境を整え、「高齢になってもその人らしい生きがいを持った生活の実現」を目標に花の街」での生活支援がスタートしました。

どのような生活支援を展開していこう……。スタート当初はとても不安でした。利用者みなさんが環境の変化に戸惑わないだろうか、スタッフが福祉用具を適切に使いこなせるだろうかと心配の種は色々ありました。中でも高齢になった障がい者支援は単純に介護力がつぎたされたものとして考えていけば良いのか悩むところでした。そのような中で「花の街」での支援がスタートしました。いざ、始めると、そんな職員の気持ちを吹き飛ばすような光景を初日から見る事ができました。

それまで、移動の際は「車椅子」を使う事が多かった一人の利用者が安全な環境と察してか「歩く」と言って花の街内を自由に歩き出しました。入浴時に洗濯物した衣類を畳んで自分の居室のダンスに収納したりと、「本来もっていた力」を一気に解放つように利用者の皆さんが自ら考え・動きそして何より「生き生き」とした表情で過ごし始めたのです。その光景を見た職員は今までにないくらい目を見開いて「すごい……」「すばらしい」という言葉が自然とこぼれてきました。また、あるとき「味噌汁」作りに挑戦したところ、職員の見守る中、調理を始めてみると野菜を綺麗に洗い、まな板の上に野菜を置いて、包丁を持つと、Aさんは、あれよあれよとみじん切りにし、Bさんは、豆腐を手際よ

く切り沸かしたお湯に「味噌」を丁寧に溶きあっというまに美味しそうな「豆腐の味噌汁」が完成しました。調理中の生き生きとした姿、楽しそうな表情、完成した時の充実した姿を見た時、「人の可能性」の凄さを改めて感じそして、それに感化されるように、所属職員も意欲的に専門書を読み、実践しまさに、利用者みなさんが職員を生かしてきたとってもよい現象が生まれました。障がい者高齢者という枠に捉われて支援しようとしていた自分の過ちに気づかされました。「人」という視点をもってもっと大切にしていけることに気づかされました。

12年前、私は「介護職」として悩みぬいた時期がありました。1つの望みを掛けて、大阪に自主研修に行ったときにその講師の方からお言葉をいただきました。それは、「介護職の最大の務めは利用者の方の人生の再構築をしていくことだ」という言葉でした。「花の街」での支援を通してその言葉の意味が少しわかったような感じがしました。人の可能性は無限です。その人一人一人の「可能性」を導き出す様に利用者の皆さんと一緒に歩く「伴走者」としての役割を持ちつつ「できること」を共に見つけだす、そんな生活支援を今後も目指していきたいと思えます。

